

梶山女学園大家政 ○富田明美, 中保淑子

目的：衣服の有効ゆとり量を見い出すことを目的として、前報では静立時における衣服と人体との空隙の状態をとらえ、着衣基体条件がゆとり量に及ぼす影響について検討した。引続き今回は、上肢挙動時における衣服と人体との空隙のあり方を明らかにした。そして、動作による衣服と人体のずれ量を求め、衣服のゆとり量との関係を検討したので報告する。

方法：被検者は年齢26歳の成人女子である。実験には、格子投影型モアレトポグラフィカメラFM-80を使用した。試料は、前報と同様、導入ゆとり量を4段階に変化させた胴衣型と袖付きウエスト切替ワンピース型衣服の8枚である。動作は片上肢前方90°上挙姿勢（前挙時）とした。得られた人体と衣服着用時のモアレ縞写真を重合し、縞数の差で空隙量を求めた。また、体表上マークと衣服上マークとの三次元的位置関係を求め、ずれ量とした。

結果：1) 前挙時の空隙分布は、静立時に比べ、挙動側で空隙量が増大し、下垂側で減少する傾向が認められた。また、挙動側の空隙量は、ゆとり導入量に比例して多くなることが解った。2) 衣服の形態別空隙量は、胴衣型の方が大きい。ワンピース型では、静立時においてゆとり保持性に有効であった袖、スカートが動作時には空隙量を減少させる要因となることが解った。3) 前挙時の体表の伸展と衣服のずれは、方向が異なることが認められた。4) 挙動側のずれ量は、後面では体表の伸展量に比例し、前面では逆比例することが解った。